

特別展「花——太古の花から青いバラまで」を振返って

国立科学博物館 植物研究部 多様性解析・保全グループ長 岩科 司

日本花菖蒲協会 顧問

三月二十四日から東京上野の国立科学博物館本館で開催されていた特別展「花——太古の花から青いバラまで」が六月十七日に無事幕を閉じた。展示期間実質三ヶ月弱で、入館者は十八万人強であった。今回の特別展はとにかく何から何まで初めてのことだらけであった。まず、国立科学博物館は本年が開館百三十周年であり、この花展はその記念行事の一環であったが、生きた植物を展示した特別展は百三十年の歴史の中で今回が初めてである。またひとつの特別展に、天皇皇后両陛下、スウェーデン国王御夫妻、秋篠宮殿下御夫妻が来られたこともこれまで初めてであった。さらに、これまで本館で行った恐竜展やミイラ展などすべての特別展は共催の新聞テレビ各社の企画立案で行われていた、すなわち持ち込みの展示であったのに対して、今回の花展は博物館が企画を立て、それを共催者側（花展では朝日新聞）に持ち込んで行った最初の特別展であった。加

えて、太陽光が一切入らない地下の展示場で、生きた植物を三ヶ月近くも展示した初めての催しであった。

この企画を立ち上げたとき、協力を依頼した植物関係の方々のほとんどは無謀とのことであった。実際にこれまでに各地で行われてきた多くの生きた植物の展示会は長くても一週間、短ければ三日間が普通である。そしてもうひとつの初めては、これまでの特別展とは異なっており、入館された方の圧倒的多数が女性であったことである。特に平日の来館者の九十%強が女性であった。

今回の特別展開催の意図は花を「わー、きれい」で済ませるのではなく、その華麗さの中にある「科学」を紹介することであった。しかし、最近の特別展は独立行政法人化以来、たとえ博物館であっても、採算を重視しなければならぬ面もあり、その間の釣り合いがなかなか困難であった。

十八万人もの人が来ると、その反応もさまざまで、大方はよかったとの評価を得た。その反面、ごく一部ではあるが見せ方が悪いなどのメールによる投書もあった。また、昨年の異常気象の影響で、北海道のメコノプシスの栽培業者の植物が壊滅状態になり、期間中にメコノプシスの花が展示できないことがあった。その時はお客さんから「金返せ」といわれたこともあったと聞いている。逆にメコノプシスでいえば、亡くなられたご主人がメコノプシスが大好きで、奥様がこの特別展のことを新聞で知り、ご主人の撮影したメコノプシスの写真を送られてきたので、その種名を教えてあげ、花展の招待券をお送りした所、病院を退院された直後だったにもかかわらず、娘さんとともに来館され、ご主人が撮影された中国の自生地での写真を額に入れてお持ちくださった。

今回の花展では、前半部はいわば

「花を通しての植物の進化と適応」の展示であったが、後半部は「人類と花の係わり」であった。ここでは期間を通して、私たちに身近な園芸植物に焦点をあてた展示を行った。前述したように、三ヶ月近い展示期間であったために、同一の植物を展示し続けるのは不可能であったため、期間を区切ってそれぞれの植物の展示を行った。三月下旬の開催時のマーガレットとアジサイに始まり、四月中旬からはチュウリップとサクラソウ、五月上旬からはカーネーションとキク、五月下旬からはトルコギキョウとペチュニア、そして六月五日から花展終了時の十七日までがハナシヨウウブの登場であった。ここまでの花卉がサクラソウを除けば、どちらかというとヨーロッパ風の品種改良がなされた花であったので、金屏風の前に配置された純和風な展示は私にとつては新鮮であった。そしてそこから入館者の質も、依然と女性客が多いのは同様であっても、何か異なったような気がした。しかし、その裏で、今回展示を行った花の中でもとりわけ、ひとつの花の寿命の短いハナシヨウウブであるから、常時満開の美しさを維持するのは極めて大変だったであろうし、実際に関係者からもその苦労話を耳にもしていた。

今回のハナショウブの展示は、日の当たらない室内という場所、「科学」を中心とした展示、そして極めて長い展示期間など、花の展示会としてはこれまで考えられない異例の催しで、その「トリ」を飾るにふさわしい展示であったと思っている。そしてその裏で、日本花菖蒲協会会員諸氏の涙ぐましいまでの努力があつてからこそ、成功した展示であつたと思う。最後に、この花展を企画立案したものと、また、開催者を代表して、今回お世話になつた椎野昌宏会長、清水弘理事長、橋本卓雄理事を始めとする日本花菖蒲協会会員に対して、深く感謝の意を表します。どうもありがとうございます。

平成十九年度秋の研究会報告

理事長 清水 弘

平成十九年十月二十八日、葛飾区郷土と天文の博物館にて秋の研究会が行われました。昨年、葛飾区在住者にも参加して頂こうと「花菖蒲の鉢植え栽培」についての一般的な話を公開で行いました。この反響が大きかつたものですから、本年は午前中から実際の植物を用いての植替え講習会を開催いたしました。区民が九名、会員も五、六名参加し和やかな雰囲気で行われました。講師は他の園芸植物や野生植物の栽培にも詳しい福住康文氏で、多くの植物に関して抜きん出た栽培技術を保持されている方です。また、氏は西田衆芳園の園主から直接、熊本式花菖蒲鉢植え栽培の薫陶を受けた今では数少なくなつた方のお一人でもありません。

「花展」(上野の国立科学博物館)での室内花菖蒲展示についての報告がありました。二週間の会期中、延べ33084人がここを訪れたそうです。花菖蒲鉢植え観賞史上、最大の催しであつたということ。さらに、鳥取県で鉢植え展示をされている山脇さんからも地元での展示会、そして花展への応援体制についての話がございました。

最後は遠方参加者からの近況報告で幕を閉じましたが、毎回、栽培方法や病虫害の話になりますと全員の目の色が変わつてきくところを見ると、会員の日々の生活の中で花菖蒲の存在が如何に大きいか分かるような気がして参ります。

講師をされた福住、金子、橋本、山脇様、ご苦労様でした。また、北や南の遠方から出向いて来られた方々、誠にありがとうございます。次回もまた楽しい一時を作つて行きたいと考えております。

雑感・表紙によせて

編集部

表紙写真に使用させていただいた写真は、数年前、北海道の別海町走古丹で七月の下旬に写したものです。現地は風蓮湖と根室海峡に挟まれた細長い砂洲で、夏でも海からの冷たい霧が飛び、木々は強風のため高く育たず、過酷な環境で必死に生き抜く自然が感じられる場所でした。神様が長年かけて創り上げたこの自然に、わずか一時間ほどしかいられない私は、冷たい風に吹かれながら一生懸命咲く花に、ほんとうに感謝したい気持ちでした。心から「ありがとうございます」と。その気持ちでシャッターを切っていました。

私たち花菖蒲の愛好家は、ノハナショウブについては、原種そのものの美しさこそを学ぶべきであると思えます。自然への畏敬、そして自然の中に美を見出す心。これが日本の美の原点です。ノハナショウブの自生地は、このことを一目瞭然のうちに教えてくれます。本協会は日本人の美意識によって創られた花を愛好し守る団体です。自生地ではなおさら、日本の美意識をもつた心で自然や花を見つめる感覚が大切であると思えます。